

令和 6 年 6 月 19 日現在

機関番号：34314

研究種目：若手研究

研究期間：2018～2023

課題番号：18K12285

研究課題名（和文）『扶桑略記』の基礎的研究 - 日本中世の歴史書の総合的理解に向けて

研究課題名（英文）A fundamental study of "Fusoryakki": To a Comprehensive Understanding of the historical book of medieval Japan

研究代表者

三好 俊徳 (Miyoshi, Toshinori)

佛教大学・仏教学部・准教授

研究者番号：00566995

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,300,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、院政期に成立した歴史書『扶桑略記』について、文学研究の立場から諸本調査や本文の分析を行い、その内容についての基礎的な検討を行った。具体的には、諸本研究、注釈的研究、他の中世の歴史書との比較研究という三つの方向から研究を推進した。コロナ禍の影響もあり、計画通りには進まなかったが、を順調に進めることができ、成立圏など『扶桑略記』の特徴について考察を深めることができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

『扶桑略記』は、逸書・逸文を多く含むこともあり、主に歴史学や文学研究で注目されてきた。しかし、その全体的な特徴については検討が少なかった。本研究によって、特に注釈的な研究を進めることができ、それに基づいて『扶桑略記』が語る歴史像の特徴の一端を明らかにすることができた。基礎的な研究を土台とした着実な『扶桑略記』研究の進展は、今後の研究の進展に大きく影響を与えることになると考えられる。

研究成果の概要（英文）：In this study, we conducted a basic examination of the contents of the "Fusoryakki", a history book established during the Heian period, by investigating various manuscripts and analyzing the text from the standpoint of literary research. Specifically, we promoted research from three directions: (1) study of various texts, (2) annotative research, and (3) comparative research with other medieval history books. Due to the Corona disaster, (1) did not proceed as planned, but I was able to make good progress on (2) and (3), and deepen our consideration of the characteristics of the "Fusoryakki", such as the area in which it was established.

研究分野：日本文学

キーワード：歴史書 扶桑略記 私撰史書 注釈研究

様式 C - 19、F - 19 - 1 (共通)

1. 研究開始当初の背景

『扶桑略記』は、本来全三十巻で構成される院政期を代表する私撰の歴史書である。その特徴の一つは典拠とする書目の種類が多様なことにあり、先行する歴史書はもちろんのこと、伝記類、靈驗記、縁起、説話集、聖教、故実書など多岐にわたる。現在では逸書とされているものも含まれており、その点でも注目されている。

そのため、『扶桑略記』についての研究は、様々な視点からなされている。そのなかでも、歴史学者の平田俊春氏は、全体に及び体系的な検討を行い、撰者などの基本情報や本文の典拠、さらに『扶桑略記』を引用する書目などを整理し、その歴史史料としての価値を明らかにした(『私撰国史の批判的研究』、1982年)。特に撰者について言えば、古くから天台宗僧皇円とされてきたが、平田氏により否定され、それ以降は様々な議論が展開している。また、近年では、『扶桑略記』の歴史叙述を物語として捉え、その特徴をとらえようとする試みもなされている。本研究もその中に位置づけられる。

しかし、多くの研究で利用されていながら、『扶桑略記』自体についての研究の数は決して多いとは言えない。その理由は、主に次の2点が考えられる。

1. 信頼のできる諸本研究の不足
2. 全体的な特徴が明確でないこと

1について、現在、『扶桑略記』を用いる研究は、基本的には新訂増補国史大系本に依っている。しかし、実は諸本が多く、国史大系本はそれら全てを踏まえた本文ではないため、最良の本文であるかどうかは疑問が残る。2については、注釈研究の成果は発表されているが、いずれも全体に及ぶものではない。また、その歴史叙述全体についての議論も十分とはいえない状況であった。

2. 研究の目的

本研究の目的は、『扶桑略記』を読み解くための基礎的な研究を行い、今後の研究の発展につなげることである。主な研究目的は、次の2点である。

(1) 諸本調査や注釈的研究を着実にを行う。その際に注意すべきは、伝本毎の残存状況である。『扶桑略記』は全巻を有する写本はなく、すべての伝本が部分的にしか遺っていない。これは、他の巻が失われたということではなく、当初よりそれらの巻のみが書写されて伝来したと考えられるべきではないだろうか。このような状況は伝本の本文にも影響を与えている可能性がある。この点を十分に踏まえた校訂本文の作成と内容の検討を行う。

(2) 歴史書を物語ととらえ、文学研究の立場から研究することで、個別の記事の史実性や資料的価値というだけでなく、全体的な歴史叙述の特徴を読みとる。さらには、本研究での実証的な『扶桑略記』の研究を踏まえて、歴史を語ることについての理論的な議論と接続する可能性も探ることも目指す。

3. 研究の方法

上記の研究の目的に基づき、以下の3つの方向から研究を推進した。

諸本研究

本研究の期間内にすべての諸本を踏まえた校訂本文を作成することは難しいため、鎌倉時代書写の大須文庫本(巻二・巻三)を中心に、主だった系統の代表的な本に基づく本文を提供することを目指した。

注釈的研究

先行研究を参考にしつつ、本文の注釈作業を行う。この作業においては、特に各記事が何を典拠としているのか、他にどのような書物にみられるのかに注目した。それは、この分析から『扶桑略記』の典拠の傾向を明らかにすることができれば、撰者あるいは成立圏についての議論に展開させることができる可能性があるからである。

中世の歴史書との比較研究

同時代の歴史書との関係性についての見取図を描く。これによって、『扶桑略記』の特徴を明確化して、特徴を整理することができると考えた。

4. 研究成果

本研究の成果を以下の5点にまとめて示す。

(1) 新訂増補国史大系本巻二・巻三の底本になっている大須文庫本の調査を行い、それに基づいた本文の校訂を行った。また、国文学研究資料館や東京大学史料編纂所が所蔵するデータベースや写真を活用しながら、主要伝本の情報収集と資料調査のための相談を行った。それをもとに諸本調査を実施して、書誌情報を踏まえた校訂作業を行う計画をしていたところ、コロナ禍の影響で計画を進めることができなくなった。延長申請を行い実施する方向で検討を続けたが、結果

的に当初の計画通りにはならなかった。写真などを用いた校訂作業を進めているので、一定程度の成果は出ているが、今後の継続課題として取り組みたい。

(2)『扶桑略記』における特定の人物や出来事の記事を詳細に検討し、それをもとに『扶桑略記』全体の特徴を考察した。その成果を、以下の3点にまとめる。

・『扶桑略記』における聖徳太子の描かれ方の特徴を検討した。特に、多くの聖徳太子伝に記される、聖徳太子が没後に中国の高僧である慧思に転生したとする説に対して疑義を呈していることに注目しながら、特徴ある太子伝となっていることを明らかにした。さらに、その『扶桑略記』の太子伝が、中世の歴史書だけでなく、寺院で行われていた聖徳太子伝研究へも影響を与えていることを指摘した。その成果は、研究論文「『扶桑略記』のなかの聖徳太子 慧思転生説を中心として」として発表している。

・『扶桑略記』は、仏教関連記事が多いことも特徴である。そのため、本研究では、特にそれらに注目した研究を行っている。注釈的研究として、法会に関する記事についても分析を行った。そのなかで、特に平安時代後期に天皇により建立された四円寺(円融寺・円教寺・円乗寺・円宗寺)で行われた法会の記事の検討をもとに、様々な種類の書籍のなかから法会の歴史についての知を集成していることを明らかにした。その成果をもちいて、論文「アーカイヴとしての『扶桑略記』」のなかで、『扶桑略記』における類聚・集成という問題を考察した。

・宗派間の教義論争である宗論や寺院間の抗争である相論の記事が多くあることにも注目し、その記事の出典や内容の特徴の分析を行った。その結果、天台宗なかでも寺門派の立場に基づく記事が多いことを明らかにし、園城寺周辺が成立圏であると考察した。その成果をもとに、「『扶桑略記』の宗派性 宗論・相論に関する言説を中心として」と題した口頭発表を行い、論文として学会誌に掲載された。また、戒律関係の記事の分析を行った。奈良時代までを中心に検討を行ったが、その結果、やはり天台宗、特に寺門派の立場が反映していることを明らかにした。その成果を用いて、論文「『扶桑略記』と仏教 戒関係記事に注目して」を執筆し、そのなかにおいても『扶桑略記』の成立圏の問題を考察した。

(3)『扶桑略記』と他の歴史書との関係性を考察するために、『仏法伝来次第』の研究を進めた。

『仏法伝来次第』は院政期に興福寺周辺で成立した歴史書であり、天竺(インド)・震旦(中国)・本朝(日本)の仏教史を記すが、本朝部の主な典拠は『扶桑略記』である。『扶桑略記』がどのような資料とともに、歴史を語るための資料として扱われているのかを検討するために、『仏法伝来次第』の他の部分の出典についても分析を行った。その結果、天竺部はいくつかの経典をもとに記述されていることを明らかにした。その成果については、中国・四川大学で行われた研究集会で口頭発表し、「院政期の仏教史叙述における仏典利用 『仏法伝来次第』を中心として」と題した論文としても公表している。

(4)『扶桑略記』の出典を検討するなかで、宗論や相論という寺院の活動において歴史が語られていたことが明らかとなり、その点からも『扶桑略記』あるいは歴史書の寺院社会における意義を考察した。その成果をもとに、「日本中世における歴史叙述の展開と寺院蔵書 『扶桑略記』を中心として」と題した口頭発表を行っている。

そのような研究の一環として、相論についての検討を深めるために、特に院政期に起こった延暦寺と興福寺との相論のなかで、興福寺から提出された奏状である『恩覚奏状』について検討した。その成果をもとに、論文「仏教文化としての相論資料 『恩覚奏状』を中心として」を執筆し、歴史を根拠として自らの優位性を主張していることを論じた。

また、中世寺院社会における『扶桑略記』の位置付けについて検討するために、特に大須文庫本が所蔵される真福寺大須文庫の聖教典籍の全体像を理解することを目的として、蔵書の調査研究も推進した。その成果は、口頭発表「真福寺大須文庫調査の現在 調査の継続と成果の公開」、論文「中世寺院の蔵書における歴史書の位相 大須文庫を例として」などで報告している。

(5)本研究は『扶桑略記』研究の基盤を整えることが大きな目的である。そのため、先行研究の整理を行い、本研究の成果も踏まえながら、研究史の総括を行った。論文「『扶桑略記』の研究史と今後の可能性」はその成果である。

また、本研究で得られた知見をもとに、仏教文学学会例会シンポジウム「中近世の寺社縁起と歴史叙述 始源の創出と変遷をたどる」においてコメンテーターを務め、歴史叙述を研究する立場からシンポジウムの目的と各報告の内容を位置づけた。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計9件（うち査読付論文 2件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 三好俊徳	4. 巻 107
2. 論文標題 院政期の仏教史叙述における仏典利用 - 『仏法伝来次第』を中心として -	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 仏教学部論集	6. 最初と最後の頁 31-43
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 三好俊徳	4. 巻
2. 論文標題 アーカイヴとしての扶桑略記	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 ことば・ほとけ・画像の交響 法会・儀礼とアーカイヴ	6. 最初と最後の頁 55-70
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 三好俊徳	4. 巻
2. 論文標題 中世寺院の蔵書における歴史書の位相 大須文庫を例として	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 宗教遺産テキスト学の創成	6. 最初と最後の頁 229-242
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 三好俊徳	4. 巻
2. 論文標題 『扶桑略記』の研究史と今後の可能性	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 『扶桑略記』の研究	6. 最初と最後の頁 7-26
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 三好俊徳	4. 巻
2. 論文標題 『扶桑略記』と仏教 戒関係記事に注目して	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 『扶桑略記』の研究	6. 最初と最後の頁 62-86
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 三好俊徳	4. 巻
2. 論文標題 大須観音ゆかりの地 初代能信の足跡を訪ねる	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 中世禅の知	6. 最初と最後の頁 306-313
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 三好俊徳	4. 巻 54
2. 論文標題 『扶桑略記』の宗派性 宗論・相論に関する言説を中心として	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 説話文学研究	6. 最初と最後の頁 146-158
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 三好俊徳	4. 巻
2. 論文標題 仏教文化としての相論資料－『恩覚奏状』を中心として－	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 龍谷大学アジア仏教文化研究叢書13 『日本仏教と論義』	6. 最初と最後の頁 473-493
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 三好俊徳	4. 巻
2. 論文標題 『扶桑略記』のなかの聖徳太子 慧思転生説を中心として	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 南岳衡山と聖徳太子信仰	6. 最初と最後の頁 135-166
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計9件 (うち招待講演 1件 / うち国際学会 2件)

1. 発表者名 三好俊徳
2. 発表標題 仏教史書のなかの寺院間対立 『扶桑略記』を中心として
3. 学会等名 佛教大学仏教学会 (招待講演)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 三好俊徳
2. 発表標題 中世歴史叙述テキストの形成と聖徳太子信仰
3. 学会等名 第4回東アジア日本研究者協議会国際学術大会 (台湾大学) (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 三好俊徳
2. 発表標題 日本中世における歴史叙述の展開と寺院蔵書 『扶桑略記』を中心として
3. 学会等名 特別ワークショップ「日本中世の歴史叙述と文学」 (タリン大学)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 三好俊徳
2. 発表標題 日本中世の宗論と文芸－歴史叙述から絵巻へ
3. 学会等名 春期特別ワークショップ「日本中世における文芸と絵画の世界－絵巻のなかの宗教・歴史・文化をめぐって」(ストラスブール大学)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 三好俊徳
2. 発表標題 『扶桑略記』の宗派性 宗論・相論に関する言説を中心に
3. 学会等名 2018年度説話文学学会大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 三好俊徳
2. 発表標題 關於日本院政時期佛教史書の經典利用 - 以《佛法傳 來次第》為中心
3. 学会等名 佛教文献与文学國際學術研討會(第五屆)(國際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 三好俊徳
2. 発表標題 真福寺聖教の書写・伝来と大須文庫の形成
3. 学会等名 名古屋大学・ハーバード大学國際ワークショップ「日本宗教研究の最前線」
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 三好俊徳
2. 発表標題 真福寺と尾張・三河の寺院 大須文庫蔵『阿娑縛抄』「反音鈔」を中心に
3. 学会等名 シンポジウム「中世禅への新視角 『中世禅籍叢刊』が開く世界」
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 三好俊徳
2. 発表標題 真福寺大須文庫調査の現在 調査の継続と成果の公開
3. 学会等名 第2回日本宗教文献調査学合同研究集会「宗教文化遺産の未来のために 宗教文献の保存と修復」
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関